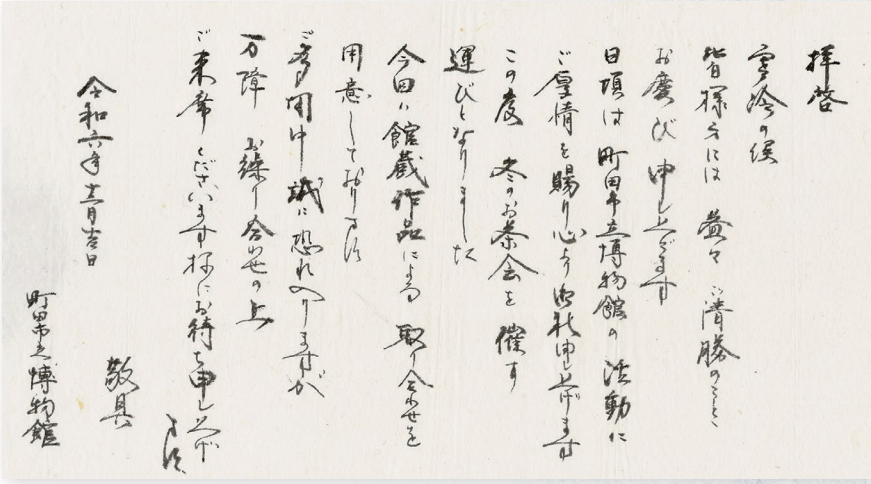
茶の湯×茶道具

―町田市立博物館所蔵品より―

協力　町田茶道会

お茶会への誘い



拝啓

寒冷の候

皆様方には益々御清勝のこととお慶び申し上げます

日頃は町田市立博物館の活動にご厚情を賜り心より御礼申し上げます

この度 冬のお茶会を催す運びとなりました

今回の館蔵作品による取り合わせを用意しております

ご多用中恐れ入りますが万障お繰り合わせの上ご来館くださいますようお待ち申し上げます

令和六年十月吉日

敬具

町田市立博物館

お茶会の案内状が届いた。

これまでお茶というものに縁がなかった私は、若干のとまどいと緊張感を覚えながら封を開けた。

さいわい、一番目のお客である正客には茶道に詳しい方がいらっしゃるようだ。亭主と正客の会話を聞きながら、お茶会の雰囲気を味わえればいいか。ほんの軽い気持ちで出席の返事を書いた。

「本日はどうぞよろしくお願いいたします」

会場に着くと、まず「待合」という席に案内され、そこで正客と挨拶した。

少しすると、亭主の手伝いをする方（半東（はんとう）というらしい）が、小さな碗に温かい飲み物を入れて持ってきてくれた。

「松竹梅が描かれた汲出碗（くみだしわん）。今の季節にぴったりですね」

「……あ、そうですね」

碗の模様なんて全く意識していなかった私は、気の利いた返事もできず、ただ相づちを打つだけだった。

汲出碗：染付松竹梅文碗　中国　明代 17世紀　景徳鎮窯

火入：醤釉火入　ベトナム チャンパ王国　15〜16世紀

（表紙）花入：青磁蓮弁文花入　中国　宋代　11〜12世紀

席入り

自分の席に座ると、亭主が現れ、丁寧に挨拶をした。私も正客を見習い、茶会に招いていただいたことへの感謝を述べる。続いて、正客が床の間に飾られた掛け軸について質問を始めた。

「お軸のお読み上げを」

「関(かん)でございます」

「どのような意味がおありでしょうか」

亭主は一呼吸おいて続ける。

「関とは、関所や関門という意味です。人は生きていく中で様々な関門に直面します。しかし、それを乗り越えていった先には、開けた未来が見えてくる、という意味が込められています」

「新しい工芸美術館の準備中ですものね」

「ええ、皆さまに愛される美術館をつくるという決意を込めております。本日もささやかな席ではございますが、当館の所蔵作品と、流儀に捉われないお道具立てによるお茶会を、お楽しみいただければと存じます」

一つの道具にこれだけの意味を込めるのか。亭主の茶会に対する真剣な気持ちに触れたような気がして、自然と居住まいを正した。

続けて、亭主が炭を直して香を焚く「炭手前」が行われた。正客が香合の拝見を請い、自分の前に回ってきた。タイの古いやきもので「宋胡録(すんころく)」※と呼ぶそうだ。見慣れない模様だが、鱗か、それとも羽かな。

香合：鉄絵魚鱗文香合　タイ
シーサッチャナーライ窯　16世紀

※シーサチャナーライ窯はサワンカローク地方にあったため、日本ではその音がなまって「宋胡録」と呼ばれた。

茶入：青磁耳付茶入
タイ
シーサッチャナーライ窯
13〜14世紀

茶碗：白磁蓮弁文茶碗
ベトナム
14世紀

水指：岩田藤七
銘「墨染」
1974年

濃茶席

懐石とお菓子が終わると、濃茶の点前が始まった。

亭主は濃茶の用意ができると、茶碗を畳の縁外に出した。正客は手元に取り込んだ後、私との間に置き、礼をした。私もあわてて礼をする。

濃茶を一口啜った正客に、亭主が尋ねた。

「お服加減はいかがでしょうか」

「大変結構でございます」

正客から茶碗を受けて、私も濃茶をいただく。

人生で初めて出会った口当たりだ。濃茶がペースト状だったとは知らなかった。後で知ったが、濃茶は「点てる」ものではなく「練る」ものらしい。想像に反して苦さはなく、かすかに甘味も感じた。

正客が亭主に茶碗をたずねた。

「お茶碗は」

「安南※の白磁『鳥の子手茶碗』でございます」

「淡い白釉の肌を鳥の卵に見立てらっしゃるのですね」

「左様でございます。このタイプの茶碗は江戸時代初期に日本にもたらされ、当時の茶人によって名付けられました」

点前が終わり、拝見に出された道具の問答が始まる。

「お茶入は」

「宋胡録の青磁です。早い時期の手で、タイ陶磁の礎となったものです」

茶碗は「卵」、この茶入は「礎」か。ここにも何か意味が込められているのだろうか。ちらっと頭をよぎったが、お茶会にふさわしい所作をしようと必死で、深く考える余裕がなかった。

※ベトナムの古い呼び方

薄茶席

先ほどの厳かな雰囲気とは異なり、心なしか空気が和んだような気がする。お茶室って意外と広かったんだな。

「宋胡録の青磁茶碗です」

亭主が正客に出した茶碗について説明する。あれ、さっき見た茶入もたしか宋胡録だった。でもこちらの方がずいぶん明るい色になったな。

「先ほどのお茶入れも宋胡録でしたね」

「左様でございます。同じ窯のやきものですが、先ほどご覧になった茶入より二百年ほど後の作品です」

「暗い夜明け前の空から、晴れ渡った空のように青く澄み渡りましたね」

私の見方もあながち間違ってなかった。それにしても亭主と正客の会話はテンポが良い。

自分の抹茶を飲み終え、茶碗を見る。

「安南の染付茶碗です。この碗が作られた頃、薄くて純白の磁器に青い絵付けをした中国の染付が流行っていました。ベトナムでは白い磁土が取れなかったのですが、それでも陶工は粘土に白泥をかけることで美しい染付を作り出しました」

材料がないから諦めるのではなく、限られた条件の中で工夫する。昔の陶工はすごいな。

茶碗：染付花唐草文茶碗
ベトナム　15〜16世紀

茶碗：青磁花文茶碗　タイ
シーサッチャナーライ窯　15〜16世紀

薄茶器：灰釉茶器
クメール　11〜12世紀

水指：白磁蓮弁文水指
ベトナム　12世紀

「お正客のお茶碗もご覧になりますか」

ちらちらと正客の茶碗を眺めていた私に、亭主が声をかける。お言葉に甘え、青磁の茶碗を手に取ると、側面の凸凹が手に心地よい。鮮やかな青緑の釉薬は透明で澄み切っている。

「青磁釉も奇麗でしょう」

「はい。晴れ渡る空、ピッタリの表現だと思います。どこまでも飛んでいけそうな……」

「卵から孵って羽ばたいていく鳥が見えましたか」

そうか。正客の一言でつながった。「関」の掛軸、小さな羽の模様の香合、卵のような茶碗、工夫によって生み出された染付、そして青空。

「最初は小さな羽でも、困難を工夫で乗り越え、最後は大きな羽を広げて「関」を超えるのですね」

「お道具から元気をもらえましたね」

「お道具の持つ力です。皆さまへのエールと共に私の決意でもあります」

「想いが届きました。私も何か新しいことに挑戦してみようかな」

「お茶を始められたらいかがですか」

「……そうですね」

一同、顔を見合わせて笑う。最後にちゃんと参加者の一人としてお茶会の空間を共有できた気がした。

「本日はおもてなしにあずかり、誠にありがとうございました」

お礼をして茶室を去る。ふと空を見上げると、来た時よりも青く澄んだように感じた。

町田市立博物館の工芸美術

町田市立博物館の工芸コレクションは、陶磁器とガラスが中心です。

陶磁器は東南アジアや中国の作品などを収蔵しており、そのバリエーションはアジア陶磁の歴史を概観できるほどです。

ガラスはボヘミアングラス、中国ガラス、近現代の日本で作られた多様なガラス作品を収蔵し、国内でも類を見ない特色あるコレクションになっています。

町田茶道会

町田茶道会は町田市を中心に活動する茶道家の集まりです。会の発足以来、流派を超えた活動を連綿と引き継ぎ、二〇二四年に創立六十周年を迎えます。月に一度行う月例茶会や小学校での出張授業など、茶道文化を市民に広く伝えています。

本企画のために、茶道具の貸出、写真への出演、取り合わせの助言などのご協力をいただきました。

イベント情報を見るなら
博物館公式 X

作品画像を見るなら
博物館公式 Instagram

MACHIDA_MUSEUM

町田市立博物館のコレクションは（仮称）町田市立国際工芸美術館に引き継がれます！

町田市立博物館は、老朽化のため二〇一九年六月をもって館内での活動を終了し、現在は市内各所で出張展示や体験講座などを実施しています。

町田市では現在、「パークミュージアム」というコンセプトにて町田駅近くの芹ヶ谷公園の再整備を進めており、新たに町田市立国際工芸美術館の建設を予定しています。豊かな自然に恵まれた公園内で、陶磁器とガラスのコレクションをご覧いただくことができるようになります。

「茶の湯×茶道具 ―町田市立博物館所蔵品より―」

発行日　二〇二四年十二月三日
編集　新井崇之、飯岡遼（町田市立博物館学芸員）
案内状筆書　髙野宗佳
撮影　小平忠生
茶室協力　有限会社　加藤美建
印刷　ニューカラー写真印刷株式会社
刊行物番号　二四―四〇
発行　町田市立博物館
東京都町田市本町田三五六二番地

本冊子は、二〇二四年十二月三日～二十二日に町田市立中央図書館で開催する「パネルで見る　茶の湯×茶道具―町田市立博物館所蔵品より―」に合わせて作成しました。

本冊子はクリエイティブ・コモンズ・ライセンス4.0（表示・非営利・改変禁止）で提供します。

この冊子は五〇〇〇部作成し、一部あたり単価は七六円です。